

■事業概要

	借款契約締結日	借款金額
新農村開発計画(Ⅰ)	1979年6月	70億円
新農村開発計画(Ⅱ)	1981年9月	70億円

1960年以降、タイの経済は急速な成長を遂げましたが、その一方で、都市部と農村部との間の所得格差の是正が重要な問題となっていました。そこで、タイ政府は、農村開発、特に貧困地域に重点を置いた経済社会開発計画を策定し実施しています。

このような背景の下で、OECFは同国北部、東北部及び南部の貧困地域における溜池建設等の社会基盤整備事業、及び裁縫等の家内工業振興事業を支援するために、建設機械・ミシン等の購入資金を二期にわたって供与しました。

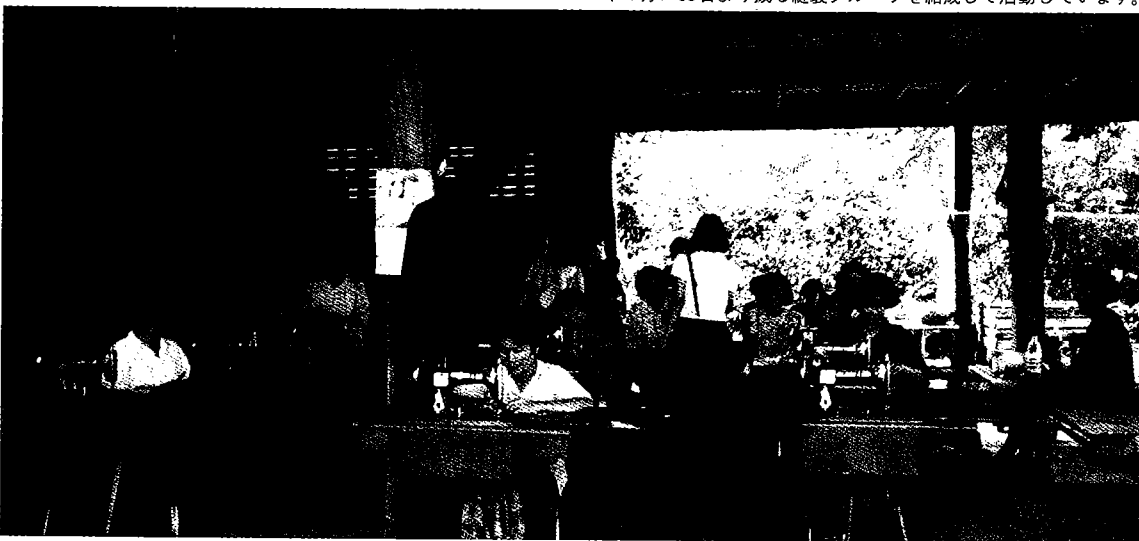
■評価結果の概要

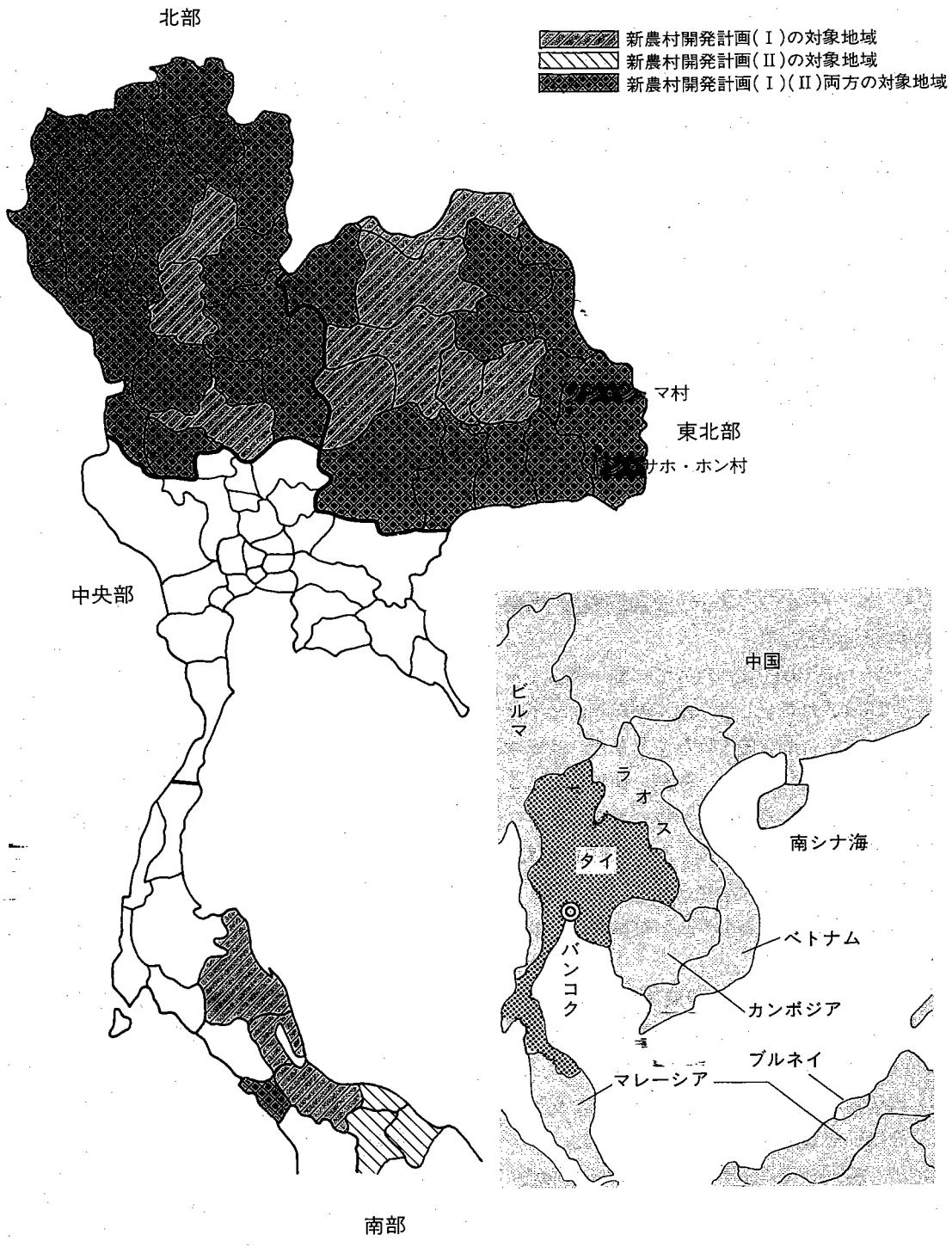
OECF借款で購入された建設機械、ミシン等の機

器は約30品目にも及び、様々な社会基盤整備事業、あるいは家内工業振興事業に投入されています。これらの事業は極めて多岐にわたる小規模なプロジェクトで構成されており、事業実施地域も広範に及んでいます。その内、例えば溜池等の水資源施設については、1,000カ所以上の場所で建設され、生活用水、養魚、家畜飲料、乾期の小規模農業用水に活用されています。また約2,500台のミシンを始めとした家内工業用機械を供与することによって、一部の家内工業では市販可能な高品質製品や新製品を作り出せるようになっていきます。

本事業において注目される点は、各事業の実施段階から村民が事業に参画したことにより、村民の間に相互扶助の精神や村の共同体意識が広がり、地域社会の組織化とその強化が図られたことです。そこで、OECFは住民参加型の開発あるいはWID(開発と女性)の観点から、具体的にどのような効果があったのかを調査するために、本事業の対象となったタイ東北部の2つの村を取り上げてケース・スタディを行いました。

▼デト・ウドム郡ムアン・デド区ドン・サオ・ホン村の女性開発委員会は、借款により他の村に導入されたミシンを貸り受け、1990年4月に35名より成る縫製グループを結成して活動しています。





新農村開発事業(Ⅰ)(Ⅱ)



▲ムアン・サムシップ郡ヤン・ヨ・バブ区ノン・シ・マ村で、1986年4月に総事業費6万2千バーツで建設されたプラスチック敷溜池(50×40×4m)。村民50名が、シート敷や溜池周辺のフェンス作りの作業に参加し、15日間で建設。乾期の家畜飲料水、洗濯等の日常生活用水、また、農業用水としても利用されています。

■調査の結果

(1)ノン・シ・マ村のプラスチック敷溜池建設事業 (住民参加型開発の例)

ノン・シ・マ村の住民は271人で、本事業によって溜池が建設されるまでは、水資源が非常に不足しており、近くに灌漑施設はなく、また、飲料水は雨期の雨水を大瓶に溜め、乾期に使用するような状況でした。ところが、他の村でプラスチック敷溜池が建設されていることを知った村民達は、自ら計画を策定し、郡の開発委員会に提出することによって自分達の村を本事業の対象にしてもらうことに成功しました。

建設にあたっては、3戸の農家が土地を提供し、技術援助センターの職員がOECF借款にて購入した建設機械を使って掘削作業を行い、50人の村民がプラスチック・シートを敷いたり、フェンスを作ったりする作業に従事しました。

溜池は、建設後既に5年が経過していますが、主として乾期における家畜飲料、洗濯等の日常生活用水、更には農業用水としても使用されていま

す。また、溜池の運用維持管理のために村民4人による委員会も設置されています。

このように、村民自らが計画、実施、そして建設終了後の管理に深く携わっている点において、本事業は住民参加型の事業と言えます。また、ノン・シ・マ村では、このプラスチック敷溜池建設事業の経験が活かされ、技術援助センターの協力の下で、村民の手による3井の公共浅井戸が建設されるなど、村民参加を主体とした各種事業が実施されるようになってきており、ノン・シ・マ村の委員会や組合活動は活発に行なわれるようになっています。

(2)ドン・サオ・ホン村の裁縫・仕立て用家内工業 振興事業(開発と女性型の例)

ドン・サオ・ホン村は水田地帯にある人口630人の村です。村民は主として農業を営んでいますが、灌漑施設がないために稲作は雨期(5月～10月)にしか出来ず、乾期(11月～4月)にはスイカや野菜を細々と栽培しています。

ドン・サオ・ホン村のあるデト・ウドム郡では、

新農村開発計画の下で6村を対象にして、女性の雇用機会促進のためOECFの借款によって購入されたミシンが供与されました。ドン・サオ・ホン村は対象外の村でしたが、関心を持った村民が他の村から8台のミシンを借り受けて、裁縫を始めました。

このミシンを借り受ける際には、村の中に女性7人による女性開発委員会が組織され、この委員会を中心として14～45才の女性35人が裁縫グループを結成し、他の村からトレーナーを招いて指導を受けた後に、交代でミシンを使用し裁縫を行っています。現在、村の女性は裁縫作業にも習熟し、ミシンをフルに活用することによって1日に1人平均10着程度の洋服を作っています。村長の話によれば今では、裁縫作業による収入は、主な収入源であった稲作よりも多くなっており、自分でミシンを購入する者も出てくるまでになって

います。

本事業を「開発と女性」の観点から見てみると、以下の点から女性の福利増進にとって望ましい事業であったと言えるでしょう。

①裁縫グループのメンバーの年齢層は14～45才と若く、家庭生活において女性としての大きな役割をもっていますが、彼女達は裁縫作業の収入により出稼ぎに行かず、家庭に居てその役割を果たせるようになりました。

②ミシンの導入は、女性達による開発委員会が提案したものです。また、同委員会では今後さらに10台のミシンとジグザグに縫えるミシンが欲しいとの強い希望を持っていました。このことは、彼女達の本事業に対する強い参加意識と向上意欲の現れと言えるでしょう。

(調査時期：1990年8月)

▼調査団のヒアリングに立ち合ったノン・シ・マ村の住民。写真前列左端がバム村長。前列右側の女性がサムニエン地域社会指導員。中央の2人は、土地を提供した村民。

